

研究者紹介

「人工知能のAIがもたらす未来」

日々進化する人工知能(AI)。AIが人類を超える日が来るのでしょうか。

関西学院大学の研究者2名が哲学的な観点と情報社会の観点からわかりやすくAIについてコメントする。



文学部教授
(こころの哲学、生命倫理、政治哲学)

浜野 研三

17世紀の哲学者ルネ・デカルトは、世界、そして人間が、物質と心というまったく異なる本性を持つ2種類のものからできていると考えました。しかし、自然科学の長足の進歩による世界像の変貌の過程で、心がものとして存在するという考えは大幅に力を失いました。しかし、このことは必ずしも、心が単なる想像力の産物にすぎないという結論を導く訳ではありません。

注目すべきなのは、心があるとわれわれに言いたくさせる、生きた人間の身体が多様な状況に応じて示す振る舞いのパターンの精妙さです。しかも、それらの精妙なパターンは、私、あなた、彼女等々のものとして一定の統合性を持った形で生み出されています。それらのパターンの多くは、感情や心情や情熱の自覚と表出を伴っています。これほど複雑で精妙な振る舞いのパターンを単なる物質の動きという視点のみから理解することは、生きた人間の身体、ひいてはその心的特性に関する十分な理解を妨げ、その価値を貶めることにつながりかねません。

私が強調したいのは、人間は、38億年の生命の進化の歴史を背負っているきわめて興味深く、また貴重な生き物であるということです。「心」やそれに関する言葉は、このような興味深く貴重な生き物の特性を表現し理解するのに非常に有益なものです。途方もない時間経過のうちに地球の生態系で生じた多くの変動の中で、生まれ、生き延び、そして多様な能力を身に付けた人類は、パスカルが「考える葦」と呼んだように、誇るべき性質と共に脆く壊れたり墮落したりする性質をもった、複雑な生き物なのです。

技術には常に悪用の危険が伴います。大きな潜在能力を持つAIのような場合、興味深く貴重な生き物たる人間との共生を常に念頭に置きつつ、その可能性の一層の進展を図るべきでしょう。労働者が単にモノとして扱われ、人類にとって最大の危機である気候変動への対応が大幅に遅れ、核技術の制御がおぼつかないという現状を考えると、生命を育んだ自然への感謝と驚異、そしてそこに生きる生命、殊に生き物としての人間への愛情に満ちた眼差しを基盤としたAIの可能性の探求を望まざるを得ません。その実現のためには市民と専門家の協力による監視の目が不可欠でしょう。AIの成果の質は、われわれの民主主義の質と分かち難く結びついているのです。



※いずれも関西学院広報誌「KGTODAY」
(2016.7発行)への寄稿の再掲載です。

理工学部教授
(システムプログラムの開発とテスト、
VLSIの設計自動化)

石浦 菜岐佐

人工知能が囲碁で名人を破ったり、車の自動運転が実用化されたりと、最近の人工知能技術の発展には目覚ましいものがあります。しかし、この流れで「やがて人工知能が人類を超える」と言われても、なかなかピンと来ないのではないのでしょうか。

現在の人工知能は、米国の哲学者ジョン・サールの言う「弱い人工知能」であり、特定の問題を解くコンピュータプログラムの一方式に過ぎません。推論や学習によって従来よりも高度な計算や判断を行います。何かを「考える」知能ではありません。

自ら考える「強い人工知能」の実現には、今とは全く異なる方式が必要で、また、単位体積あたりの計算能力も全然足りません。現在、脳全体を化学反応レベルでシミュレーションしたり、脳の計算機構を電子回路で実装したりといった研究が行われています。また、電子回路とは全く異なる新しい計算機構の研究も進められています。

数多くのブレークスルーを経て、いったん人類を超える知能が出現すると、その知能は自身で更に高い知能を開発するというプロセスの繰り返しにより、すぐに人類が草木や岩石のように見えるほどの「超知能」に成長します。それがもたらす想像を絶する技術革新は「技術的特異点」と呼ばれ、それ以降の地球上で何が起こるかは予測不能とされています。

まるでSFですが、米国の発明家レイ・カーツワイルは著書でこれが現実にわずか30年後に起こると予測しており(大変真面目な技術予測です)、「2045年問題」として知られています。人類の知性による約200万年の地上支配があと30年で終わるとしたら、あまりに衝撃的です。

この問題は、知性とは何か、人間の存在意義は何か、人類は急激に発達する科学技術をどう扱うべきなのか、などさまざまなことについて深く考えさせてくれます。実際30年後には何も起きていないかも知れませんが、100年後だともうわかりません。

皆さんもこれを機会にこの問題について考えるとともに、少し心の準備を始めていただければと思います。

関西学院大学の研究者の研究内容などは下記ウェブサイト「研究者データベース」から検索できます。

ぜひ、取材の際、ご活用ください。 <http://www.kwansei.ac.jp/kenkyu/>